古田史学の会・東海　　平成28年

東 海 の 古 代

第194号　2016年10月

会長　：　竹内　強　　副会長・発行　：　林　伸禧
編集　：　石田敬一　　投稿先アドレス：　furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
ＨＰ　：　http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

神武天皇の熊野からの侵入譚の検証

名古屋市　　佐藤章司

１、はじめに

神武天皇（神倭伊波礼毘古命）の熊野侵入譚は、元々、倭国始祖であるニニギの命による倭国（九州王朝）建国譚との一体の説話だったものを盗用し、熊野侵入譚に挿入して、神武天皇（神倭伊波礼毘古命）を大和王朝始祖説話に転用して着飾ったものである。以下はこれの解明の試みである。

なお、『古事記』『日本書紀』の記事については、それぞれ講談社学術文庫207『古事記(上)全訳注』(1977年、次田真幸編)、講談社学術文庫『日本書紀(上)全現代語訳』(1988年、宇治谷 孟編）から引用した。以下、各々、講談社版古事記、講談社版書紀とする。

２、高倉下の見た夢

熊野の村に到着された時「熊の精」のため正気を失なってしまうが、この時に熊野の高倉下（たかくらじ）から天つ神の御子に大刀の献上があり、正気を取り戻す。

高倉下が見たとされる夢の内容は「わたしが夢にみましたことは、天照大御神と高木神の二柱の神の御命令で、タテミカズキ【原文：建御雷】の神を呼び寄せて仰せられるには、『葦原の中つ国は、ひどく騒然としてようだ。わが御子たちは病み悩んでいるらしい。その葦原の中国は、もっぱらあなたが服従させた国である。だからそなたタケミカズチの神が降っていきなさい。』と仰せになりました」

これに応えてタケミカズキの神が申すには、「わたしが降りませんでも～～大刀を降ろしましょう～タカクラジ【原文：高倉下】神の倉の棟を穿って、そこの穴から落とし入れることにしょう～ 」

（講談社版古事記、アンダーライン及び【 】は佐藤が加筆、以下同じ）

これが「高倉下の見た夢」の概要である。この説話のポイントのひとつが、高倉下は「天孫降臨」説話時の登場人物ではないか、ということである。『古事記』の記述するように神倭伊波礼毘古命の「熊野侵入伝」での登場では建御雷神の大刀を受け取って「天つ神の御子＝神倭伊波礼毘古命」に献上するなどできるはずもない。

高倉下の大刀の献上の後、『高木の大神の仰せで教えて申されるには～』と語られ、八咫烏が遣わされるが、この場合も高木の大神と神倭伊波礼毘古命の間には時間的・空間的（高天原と熊野）隔たりがあって、「夢の中で聞いた」では架空話でしかない。しかし、一旦、天孫降臨である「天つ神の御子であるニニギの命」の説話とすると、同一時間帯となる。「軍事的支援」として道先案内人の「八咫烏」が派遣されて来たとすれば、この説話は同一空間・同一時間帯に語られていることになり、一気にリアルな説話となる。

３、天つ神の命と国つ神

Ａ、天つ神の命

『古事記』では天つ神の御子は熊野侵入譚以前には次のように現れる。

① 国譲り－１「畏まりました。この国は天つ神の御子に奉りましょう」・・・事代主神

② 国譲り－２「この葦原中国は天つ神の御子のお言葉に従って、献りましょう」
・・・建御名方神

③ 国譲り－３「～この葦原中国は仰せの通り、ことごとく献上致しましょう。ただ私が住むところは天つ神の御子が皇位をお継ぎになるりっぱな宮殿～」・・・大国主

④ 天孫降臨―１「～天つ神の御子が天降っておいでになる、と聞きましたので、ご先導役に仕えいたそうと思って、お迎えに～」
・・・・・サルタヒコ

⑤ 天孫降臨―２「～天つ神御子の御寿命は木の花のように、はかなく～」
・・・木之花佐久夜毘売　（講談社版古事記）

又、この天つ神御子は下に記すように、吉野での神武侵入譚にも表れる。

Ｂ、吉野

「～八咫烏の後についてお進みになると、吉野川の川下【原文：到吉野河之河尻】にお着きになったとき、筌（うけ）を作って魚を取っている人がいた。そこで天つ神の御子が「お前は誰か」と、お尋ねになると「私は国つ神で名はニヘモツノコと言います」と、お答え申した。これは阿陀の鵜飼部の祖先である。

そこからさらにお進みになると、尾の生えた人が井から出てきた。その井の中は光っていた。そこで、「お前はだれか」とお尋ねになると「私は国つ神で、名は井ヒカという者です」とお答え申した。これは吉野首らの祖先である。

そこでその山にお入りになると、また尾の生えた人にお会いになった。この人は岩を押し分けて出てきた。そこで「お前はだれか」と、お尋ねになると「私は国つ神で、名はイワオシワクノコと言います。今、天つ神の御子がお出でになると聞きましたので、お迎えに参ったのです」とお答え申した。これは吉野の国栖（くず）の祖先である。

（講談社版古事記）

上の文の登場人物、地形・地勢、地名等を検証すると、その際のポイントになるものは、次の①八咫烏、②吉野川の川尻、③天つ神の御子、④国つ神にある。

①八咫烏

天つ神の御子とは『古事記』にあっては「国譲り」「天孫降臨」「神武記の吉野の地」での用語であり、八咫烏はここでは先導役として語られるが、八咫烏を遣わせたのは高木大神であり、この神は天孫降臨時に出現するのであって、ニニギにとって母親の父（祖父）である。神武記での出現では語られる時間帯が違う。

②吉野

吉野は紀ノ川の支流である吉野川流域にあって、この説話の川尻とは海岸に接する河口を表しているので、この吉野は大和のような内陸部にあるのではなく、海岸近辺にあることを示している。『日本書紀』持統天皇紀の吉野行幸記事について、『壬申大乱』（古田武彦著、東洋書林、2001年）では、34年遡った九州王朝の天子が佐賀県吉野への軍事査察とすることや、柿本人麻呂作歌の吉野は大和の吉野ではなく佐賀県吉野で吉野川は現嘉瀬川であるとの見解であり参考になる。

さて、神武記に話を戻すと、では、どこから大和（吉野）に侵入したのかと問えば、五瀬命を紀伊国の男之水門に埋葬した後、そのまま紀ノ川を遡上したのである。それを示す一句は五瀬命の言い放った「私は日の神のみ子として日に向かって戦ったから負けた。これからは日を背にして戦おう」である。

この言葉が本来語られていたであろう紀ノ川からの侵入を隠して、熊野へと誘導している。敗戦原因が太陽の位置に関係したなどあるはずもない。五瀬命を竈山に埋葬した後、神倭伊波礼毘古命が熊野村に到着したと記すがこれは「神倭伊波礼毘古命＝天つ神の御子」とする『古事記』編纂者の改竄が加わっている。この熊野村到着時には神倭伊波礼毘古命と記すが、この後、本来あるべき熊野から吉野に至る大半の行路である紀伊半島縦断時の説話はない。吉野での呼称は「天つ神の御子」となることに注目すべきであろうし、神武天皇の兄の五瀬命は「天つ神の御子」ではなく「日の神の御子」となっていることにも注目してよいだろう。

C，国つ神

国つ神は次のように現れる。

① 葦原中つ国の平定－１「この国には、暴威をふるう乱暴国つ神どもが大勢いると思われるどの神を遣わして」

② 天孫降臨―１「私は国つ神で名はサルタヒコ神と申します。私がここに出でくる理由は天つ神の御子天降ってります。と聞き～」

③ 天孫降臨―２「サクヤヒメはただ一度の契りで妊娠したというのか、それは私の子ではあるまい。きっと国つ神の子に違いない」

④ 神武東侵―１「亀の甲に乗って速吸門で出会う～私は国つ神です～」　（講談社版古事記）

又、上に記した吉野の国つ神には、名はニヘモツノコ・名はヰヒカ・名はイワオシワクノコ等がいるが天つ神の御子と共に出現する。

４、道臣命と大久米命

宇陀で、大伴の連祖（道臣命）と久米直祖（大久米命）による、兄（え）うかしの虐殺が語られるが、大伴の連と久米直の二人は「天孫降臨」説話で高天原からニニギの命に付き従ってきた人物であって、神倭伊波礼毘古命の東侵には同行していない。神倭伊波礼毘古命の東侵に出発時の筑紫から同行した者である。

Ａ：五瀬命とタギシミミ以外は不明

・・・『古事記』

Ｂ：四人の兄弟、諸皇子、舟軍

・・・『日本書紀』

これらに対して、天孫降臨説話では次のとおり記される。

「筑紫【原文：竺築】の日向の高千穂の霊峰【くじふる岳】に天降りになった。そのときアメノオシヒノ命【天忍日命】・アマツクメノ命【天津久米命】二人～天忍日命は大伴連の祖先、天津久米命は久米直の祖先である」　（講談社版古事記）

宇陀での兄うかしの虐殺は天孫降臨時のニニギ命によるものとなる。神倭伊波礼毘古命の東侵に「大伴連と久米直」が不在であるのは、久米歌は「天孫降臨」を歌ったものであり、久米歌があるから久米直は神倭伊波礼毘古命に同行した、とするものではない。

これに先立って宇陀の地で言う。

～今、天つ神の御子幸行せり、汝等仕え奉らむや」といいき。～その鳴鏑（なりかぶら）の落ちし地を訶夫羅前（さき）と謂う。

上の訶夫羅前は、講談社版古事記の注意書きで所在不詳とされているが「前」（さき）は御前と同義であってニニギと木之花佐久夜毘売が出会った笠沙御前と同じように岬・崎・碕であって、内陸部ではなく宇陀は海岸部にある。それを示すものが次の歌謡である。

菟田の　高城に　シキわな張る　我が待つや　シキは障らず　いつくはし　鷹等【原文は區旎等＝くじら】障り　前妻（こなみ）が　肴乞はさば　立ち蕎麦の　実の無けくを　こきしひえね　後妻（うはなり）が　肴乞わさば　斎賢木　実の多けくを　こきたひえね　（講談社版書紀）

この歌謡の歌われている菟田（宇陀）での鷹等の講談社版書紀の記述は『日本書紀』の原文では區旎等（くじら）（『古事記』は「久治良」）とあり海岸部に求めるべきこと道理であろう。「區旎等＝鯨」と訳したものに既に『神武歌謡は生き返った』（古田武彦著、新泉社、1992年）があるが、この本では、この詩（謡）の舞台は神武達の生まれ育った故郷で歌われていたものを大和の宇陀の地において歌ったもので、上の歌を大和の内陸部で歌っても矛盾しないとしている。しかし、この宇陀は大和という内陸部にあるのではなく、九州の宇陀での事件であることを証明するものに、先に記した兄うかしの射った矢の落ちたとして名つけられた訶夫羅前（さき）という前（さき）＝岬・碕・崎等の海岸部を示す地名にある。だから鷹等ではなく區旎等＝鯨である。兄うかし、弟うかしは天孫降臨地の筑紫の宇陀・訶夫羅前で生きた人間なのだ。

５、土雲（『日本書紀』では土蜘蛛と表記）

土雲について『古事記』に次のとおり記す。

忍坂の大室に至りましし時、尾生えたる土雲八十建その室にあり～ここに天つ神の御子の命もちて～歌を聞かば、一時共に斬れ～

（講談社版古事記）

一時に皆殺しをするが、この説話のポイントとなるものは天つ神の御子と土雲にある。

書紀では次のとおり記す。

Ａ：９月５日

～天皇は宇陀の高倉山の頂に登って、国の中を眺められた。～（略）～この夜、神に祈って寝られた。夢に天神が現われて教えて言われた。「天香山の社の中の土をとって、平瓦八十枚をつくり、同じくお神酒を入れる瓶をつくり、天神地祇をおまつりせよ。また身を清めて行う呪詛をせよ。このようにすれば敵は自然に降伏するだろう」と。天皇は夢の教えをつつしみ承り、これを行おうとした。その時弟猾がまた申しあげるのに倭国の磯城邑に、磯城の八十梟帥がいます。また高尾張邑（ある本に云く、葛城邑という）に赤銅の八十梟帥がいます。～（略）～椎根津彦と弟猾の二人を香山【此云、介遇夜摩】の頂の土を取ってこさせて～。

Ｂ：天香山

～天皇は前年の秋９月、ひそかに天香山の埴土をとり、八十平瓮をつくり自ら斎戒して諸神を祀られた。そしてついに區宇（あめのした）を安定することができた。故に土を取りし処を名付けて埴安という。（講談社版書紀）

書紀編纂者は天香山とは、大和三山のひとつとされている香具山のことであると「埴安」の地名を記すことによって強調しているが、特にこの山が平瓮（ひらか）を作るのに合っている埴土があるわけではない。上の説話のポイントには「天香山はどこにあるか？」ということになるが、『古代史の十字路　万葉批判』古田武彦著、ミネルヴァ書房、2012年）に示されるように、

①岩屋戸の祭祀を執り行う場所の近くにあり

②万葉集一巻２の天皇（舒明天皇）、香具山に登りて望国しましし時の御製の歌

等の分析から豊国（大分）にある鶴見岳である。

上の説話では誰が天香山の埴土をとる事が出きるかと言えば、この支配地征服譚はニニギ命による以外になかろう。元々は、ニニギの命による天孫降臨説話の一コマとして記述されていたものを神武天皇説話へ書紀編纂者は転用した。香山は先に記した様に天の領域の聖地であり、祭祀に使う埴土「土器をつくる土＝火の土」や牡鹿の肩骨、この骨を焼く桜木は、どこにでもあるものであるが、祭祀に用いるものは天香山のものでなくてはダメなのだ、ということにある。

６、ニギハヤヒ命とナガスネヒコ

書紀には、ニギハヤヒ命について次の記述があり、以下はその検討である。

「昔、天神の御子が天磐船に乗って天降られてました。櫛玉ニギハヤヒ命といいます。この人が我が妹の三炊屋媛を娶って子が出来ました。名を可美真手命（うましまでのみこと）といいます。それで手前はニギハヤヒの命を君として仕えています。一体天神の子は二人おられるのですか～」～（略）～ニギハヤヒの命はもとより天神が深く心配されるのは、天孫のことだけであることを知っていた。（講談社版書紀）

上に引用した文中からキーポイントとなるのは、①天神御子、②天孫、③天降る、④天磐船にあり、天孫は神武を示すかと問えば天照大神の孫のニニギの命以外にはなく、神武を指す用語ではない。又大和という内陸部に天磐船が行くことも着くこともできない。ニギハヤヒは大和ではなくニニギ命と同じ筑紫の海岸に着いたのである。それを天降ったと表記した。天上から地上に降りるとする架空話ではなく、高天原を原点とする海上の水平移動である。それを示すものが天磐船である。

書紀編纂者は元々は九州王朝の始祖説話であるこの「ニニギの命の征服譚」を神武紀に転用して神武を着飾って編纂した。その際の残滓が天孫であり、天降るであり、天神の御子である。そのために記紀編纂者はニニギ命を短命だったと思わせる説話の木花之佐久夜毘売（短命のシンボル）と石長比売（長寿のシンボル）の姉妹の登場まで用意している。

ニギハヤヒの命やナガスネヒコは、天孫降臨説話の時間帯に生きた人間だったのである。

「ニギハヤヒの命参赴きて、天つ神の御子に白さく「天つ神の御子天降りましぬと聞きしかば、追いて参降り来つ」と記し、続けて「**かく荒ぶる神どもを言向け和平して、伏はぬ人どもを退けはらいて畝火の白橿原宮に坐して天の下治らしめき**」（講談社版古事記）と記す。

この「伏はぬ人ども」とは、ニニギ命やニギハヤヒ命に追われたナガスネヒコ達であり、東

日流（津軽）へと逃れ、その地で水田稲作を始めたのではなかろうか。特に東北の水田稲作は、1983年に発見された青森県垂柳遺跡で畔で区画された水田跡が発見されている。さらに青森県砂沢遺跡では水田跡から「遠賀川系土器」が発見され、青森県の水田稲作は弥生前期末までさかのぼることが出来る。水田稲作は５～１０月の温度によって、収穫が決まるので東北、特に青森県では九州からの伝来も可能だったのだろう。

上に記した水田跡は北部九州の板付遺跡や菜畑遺跡の水田跡と類似しているので、九州人が青森（垂柳遺跡）に移動して住み付いたのであろう。この背後には「天孫降臨」が史実としてある。

① 稲作民を征服、支配した。
　⇒魏志倭人伝の「大人」の祖先
② 海人族の支配を受け入れた稲作民。
　⇒魏志倭人伝の「下戸」の祖先
③ 青森（東日流）へ稲作技術を持って逃れた。
　⇒弥生前期末の垂柳遺跡人等

筑紫から青森へ流れ津軽海峡に抜ける対馬海流に乗って移動すれば可能であろう。事実、九州各地の遺跡から出土するゴボウラ貝の貝輪や遠賀川系土器が出土している。

７、丘岬と土蜘蛛

ナガスネヒコを殺害した後の記事に注目する。

～曾富県の波哆の丘岬【此云塢介佐棄】に、新城戸畔という者があり、また和珥の坂下に、居勢祝という者があり、臍見の長柄の丘岬に、猪祝という者があり、この三か所の土蜘蛛はその力を恃んで帰順しなかった。～皆誅しにさせた。

（講談社版書紀）

この説話でキーポイントは地形を表す「丘岬」にある。

ここは大和などの内陸部ではなくて海岸部であり、それが丘岬の表記である。どこの海岸部かと問えば、九州北部の海岸以外にない。曾富県の波哆、和珥の坂下、臍見の長柄の地名（大和内にある地名と確定できているわけではない）が記載されているが、地名は変わる（変える）可能性が多いが、地形・地勢はほとんど変わらないという視点が大切であり、一般的には地名より地形を優先させるべきであろう。

８、夜麻登≠倭

倭（やまと）の高佐士野を　七行く　媛女（をとめ）ども　誰をしまかむ

（講談社版古事記）

（原文）**夜麻登能　多加佐士怒袁　那那由久袁登賣杼母　多禮袁志摩加牟**

上の歌のポイントは「夜麻登（やまと）」と「多加佐士怒（たかさしの）」であるが、これを「倭」で表記するのが一般的だが、「やまと」は国名をあらわす言葉であって、大和には地名として夜麻登（やまと）があるわけではない。

この時点で神倭伊波礼毘古命が大和（国）を支配しているわけではなく、一地方名である、この夜麻登は大和国にはないから、その地を求めれば博多湾沿岸にある「夜麻登＝山門」を示していて、「天孫降臨説話」からの転用ということになる。多加佐士怒は所在未詳となっているが、大和の地で探すのではなくて、上に記した「山門（やまと）」の近くから探すべきである。

９、神武天皇の大和侵入譚の特徴

① 後方支援部隊がいない。
② 父親である鵜葺草葺不合命の姿がまったく見えないのは「東方に行こうではないか」と高千穂宮で兄弟間で、相談し合った時には、既に父親が亡くなって、父親からの支援が得られない事態になっていた。と考えて良いだろう。

そんな状態で、説話どおりの殺戮を繰り返しながらの大和盆地への侵入であったとすれば、最大の謎は「殺戮を繰り返した彼ら達に大和という盆地の中で、周囲を敵意と恨みを持つ、敵に取り囲まれて、生存できるような居場所があったか」である。この疑問を解消してくれるのが下の考察である。

ニニギの命の天孫降臨説話と神倭伊波礼毘古命による熊野侵入説話には「平和裏」と「殺戮」の取替えが行われている。

すなわち、真相は神武（神倭伊波礼毘古命）は平和裏に大和に侵入し、ニニギの命は殺戮を繰り返しながら新天地の筑紫を支配した。

五瀬命を紀ノ川の河口にある竈山に埋葬した

あと、そのまま紀ノ川を遡って吉野を経て畝火の白檮原に営んだ。そこでは異邦人である神倭伊波礼毘古命達が平和裏だったからこそ「穏やかに」以後の生活ができたのだろう。後方部隊を持たない神倭伊波礼毘古命の採りえる唯一の選択肢であった。彼らにとって必要なことは、常に周囲との協調であったはずであり、筑紫を出て、安芸で７年、吉備で８年（二倍年歴）を費やした彼らはそのことを十分に理解していたのだろう。

海人（天）族という特性と、筑紫～阿岐～吉備～大和という滞在経験と、培った人脈を利用して交易（とりわけ吉備との交易）に従事しながら信頼を勝ち得たのだろう。合わせて婚姻を重ねて信頼を不動のものにし、国の「市」を支配しながら力を蓄えていったと思われる。

上の状況を天武天皇は嫌って、「九州王朝（諸家）の帝紀や本辞」に記述されていた説話を利用し、力でねじ伏せた説話へと変換して、本来あった記述を削除した。これが『古事記』序文でいう「偽を削り実を定める」と言うものの実質のひとつだったと思われる。

また、ニニギ命による「天の下」（新天地の筑紫）征服譚は、九州王朝の始祖説話として大切に語り継がれたものと思われる。これが『宋書』倭国伝に記す倭王武の上表文にみえる「**～昔より祖禰（そでい）みずから甲冑を擐き、山川を跋渉し、寧処に遑（いとま）あらず～**」ではなかろうか、今後の課題とし、九州王朝始祖説話の復元を試みたい。

なお、「祖禰（そでい）みずから」＝ニニギ命である。

幻の小人・・・コロポックル

千歳市　　今井俊圀

皆さんはご存知の事と思います、「コロポックル伝説」を。そう、アイヌの人達の民話の中に出てくる「フキの下に住むという小人」の物語です。

昭和47年に日本放送出版協会から発刊された浅井亨編の『日本の昔話　２　アイヌの昔話』という本にはこう書かれています。

ずっと昔はシベッ（十勝川）に沿ってアイヌのほかにコルポクウンクル（ふきの下に住む者）も住んでいたと。コルポクウンクルは背が低くてふきの下に５人、６人もかたまって住んでるくらい、ちっちやいものだったそうな。ごはんを作ると必ず部落の人の所へ持ってきたそうで、何でも人にやるのが好きだったらしいな。自分たちでごちそうを作ると、それをイタンキ（お椀）いっぱいに盛ってアイヌのところへ来て、アパオロツペ（戸口のかけござ）の下から手だけ出してイタンキをよこしたそうな。アィヌがそれを受け取って押しいただくと、コルポクウンクルは喜んでいたと。

アィヌノコタンに一人者のウエンクル（悪い奴がいて）、ある日コルポクウンクルがアパオロツペの下からイタンキにごちそうをいれてよこしたとき、そのコルポクウンクルカムィの手首を押さえ、とうとう家の中へ引っぱっていれたと。やっと引きいれてそのコルポクウンクルカムィを見たらまっぱだかの小さな女であったと。その女はそれから泣き泣き帰っていったと。そうしたらコルポクウンクルの親方が怒って来たと。

それまではこの辺はシアンルルコタンという名前の立派なコタンだったけれど、コルポクウンクルたちがイケスイ（激怒して）レブンコタン（海の向こうの国）に引きあげるときに、コルポクウンクルの親方がこう言ったと。

「このコタンはシアンルルコタンであったが、これからはこのコタンのものはネプ・チー（何でもやけろ）」。

コルポクウンクルの親方が怒って、

「このコタンをトカプチー（枯れてしまう）って名前つけるから」といってどこかへ行ってしまったと。それからこのコタンをトカプチコタンと呼ぶようになったとさ。これがそのウチヤシクマ（お話）だ。

この話は十勝地方の「トカチ」という地名の起源説話ですが、1969年（昭和44年）に帯広に住む三浦ノブさんというアイヌの語り部の人が語ってくれた物語だそうですが、アイヌの人達は「フキの下に住む者」や、自分たちより背が低いとは言っても「小人」とは言っていません。どうして「小人伝説」が生まれたのでしょう。

私たちが知っているフキは、日本全国の山野に自生し、ほとんどが「愛知早生」「水ブキ」「秋

田食蕗」と九州地方で栽培されているキク科の多年草「石蕗（ツワブキ)」のいずれかに分類されます。これらのフキは40～50cm位のものが普通で、その下に住むと言うのなら、せいぜい20～30cm位いの小人であろうと、「アイヌ民話集」などを編集した人達が考えても不思議ではなく、そこから「小人伝説」が生まれたものと思われます。

でも、北海道の人なら知っています。大型種の「アキタブキ」と同じ種類の身の丈２ｍを超える巨大な「ラワンブキ」(螺湾蕗）がある事を。十勝地方の地図を見ると分かりますが、十勝川をさかのぼって行くと豊頃町で支流の利別川(トシベツ川）と合流します。その利別川を更に池田町、本別町とさかのぼり足寄郡足寄（あしょろ）町に入ると、その支流に螺湾川（ラワン川）があります。その螺湾川の流域一帯にこの「ラワンブキ」が自生するのです。２ｍを超えるフキの下に暮らす人達ならば20～30cm位の小人でなく普通の背丈の人でも良い訳です。

現在では、この「ラワンプキ」は足寄町にしか自生していませんが、足寄町から南に十勝川を下った白糠郡音別（おんべつ）町の霧里川周辺には、かつて同種の「オオブキ」が群生していましたが、乱獲によって絶滅したとされています（音別町では、2003年に「オオブキ」を移植し、町興しに活用しています)。

つまり、十勝川左岸周辺には、この「ラワンブキ」と同種の「オオブキ」が群生する地がたくさんあり、その何処かに（おそらく池田町・浦幌町辺り）アイヌの人達に「コルポクウンクル（ふきの下に住む者)」と呼ばれた、アイヌの人達よりも少し小柄な先住民がいたという事です。

そもそも、この「コルポクウンクル説話」はアイヌの人達全体の伝承ではなく、十勝地方に住む「十勝アイヌ」と呼ばれる人達固有の説話なのです。

『足寄町史』によれば、十勝アイヌには今から1000～1500年前に起こったとされる十勝岳大爆発を語る説話がなく、また、明治末期現在で６代以前の先祖にまで及ぶ伝承がないので、11世紀～15世紀頃の間に十勝地方に移り住んだとされています。おそらく、「アイヌ期」が開始されたとする13世紀以降に、別の地方（おそらく西の方）からこの十勝地方に移り住んだと考えてよいと思います。そして、コルポクウンクルの人達は色の白い心のやさしい種族であったが、よそから移住してきたアイヌ達に追い立てられ迫害されたとしています。

では、「アイヌ民話集」を編纂した人達が,「コルポクウンクル」を「小人」としたきっかけは何だったのでしょうか？

それは、1886年（明治19年）に東京帝国大学・理学部教授の坪井正五郎が、「日本の先住民・コロポックル説」を発表した事による、同大学・医学大学学長の小金井良精の「アイヌ説」との間の、いわゆる「コロポックル論争」で、「コロポックル・小人説」が世に広まっていったのです。その論争の中で坪井氏は、次のように述べています。

私は第二紀年會に於て貝塚の事を述べて「私は古の東夷なる語は今日のアイノのみならず他の日本人ならぬ人種をも含んで居ると考へますから貝塚は何れ東夷人の遺跡と云ふて好からうと思ひますが此人種はアイノ前の土人と云ふより寧アイノならざる土人と云ふ可きかと考へます云々」と申しましたが末だ何者が貝塚を作たのか判然たる証跡を獲ません、併し私は多分所謂コロポツクルが作たので有らうと思て居りました・・・・・中略・・・・・・

廣澤安住氏はアイノの遺跡と云ふ文中に土器、石器、貝塚等の事を記されました一寸と考へると同氏も貝塚はアイノの作たものとさる→様に兄へますが同じ文中に「アイノ種ニ二種アリソノ一ハ今時北海道ニアルアイノニシテ他ノ一ハ今娩二千島ノシムシー島二嘩レル童人種ナリ此童人種ナルモノハ古代ヨリ自ラ二種ノ入鹿ここシテ北海道ハ論モナシ奥州地方ニモ古代ハ必ズ雑住セイナルベシ」と有るを見れば必しも今のアイノの祖先が作たとはせられぬ様子でムります、同氏は又童人種の事と題して千島からシャコタンに移した土人の事を記されましたが此種族は竪穴に住み土器を作るとの事でありますし宮部金吾氏に従へば身の丈が短いとの事ですから所謂コロポツクルと性質が類似して居て我々をして之或は本州及び北海道に多くの貝塚、土器、石器を遺した者の子孫では無いかと思はしめまする、・・・・以下略

そして、坪井氏が触発されたとされるレポートがあります。それは1886年（明治19年）東大教授の渡瀬床三郎が『東京人類學會報告』第壹号に発表した「札幌近傍ピットと其他古跡の事」です。渡瀬氏はその中で、「**東ノ方日高十勝ニハ一般ニアリ是ニ住ヒシバ恐ラクアイノノ前ノ土人即チコビト又ハコロポックルト稱フルモノナル可シ**」と、述べています。おそらく、坪井氏も渡瀬氏も「ラワンブキ」や「オオブキ」の存在を知らなかったのでしょう。そこに、「小人説」が生まれた大きな原因があったのです。そして、多くの「アイヌ民話集」によって大人から子供まで知っている「コロポックル・小人伝説」が世に広まったのです。

では、アイヌの人達よりも前に十勝に住んでいた人達とはどんな人達だったのでしょうか？

私は前述の「アイヌの昔話」に注目しました。その中ではコルポクウンクルの人達は「レブンコタン（海の向こうの国）」に引きあげたとされていて、又、アイヌの人達よりも背が低いとされています。北海道では、続縄文時代から擦文時代（5～13世紀）にかけて、オホーツク海沿岸一帯に「オホーツク文化」と呼ばれる、北海道の他の地域とは違う文化が広がります。それは、サハリン南部や千島列島一帯にまで広がるのです。そして、この人達はもともと北海道にいたのではなく、海を渡って北海道に来たとされています。この文化を担った人たちの出自は、

① サハリン（樺太）、クリル（千島）のアイヌ民族説

② ニブフ（ギリヤーク）民族説、サハリン北部に在住

③ ウリチ・オロチ・ナーナイ民族等アムール下流域民説

④ ウイルタ（オロツコ）民族説、サハリン北部・ニプフよりも南に在住

⑤ 黒水靺鞨説

⑥ すでに消滅した民族説

等の諸説があり、未だ確定していません。北大の菊池俊彦教授は、サハリンや沿海州にかけて住んでいるギリヤーク（ニヴフ民族）ではないかとされています。私は、単一民族ではなく、サハリンやアムール川下流域にいた諸民族が混合したものではないかと思っています。

彼らは終末期には一部の人達が内陸部に移住し、弟子屈町に下鋒鐺遺跡を残すグループも現れたとされています。（この弟子屈町の下鐺別遺跡は、大雪山系の雌阿寒岳をはさんで、西側に「ラワンブキ」の自生する足寄町があります）又、「オホーツク文化」の後半、９末～13世紀に知床半島から根室にかけて、更に十勝川河口付近の太平洋沿岸にまで広がった、擦文文化の影響を受けた「トビニタイ文化」を担った人達がいて、十勝川河口の浦幌町に「十勝太古川遺跡」「十勝太若月遼跡」を残しています。

残念ながら、前述の足寄町・音別町・池田町・浦幌町内陸部等に「オホーツク文化」「トビニタイ文化」の痕跡はまだ発見されていませんが、コルポクウンクルの人達は「オホーツク文化」「トビニタイ文化」の人達なのではないかと私は考えています。

尚、「オホーツク文化」「トビニタイ文化」の人達の人骨の発見例が少なく、身長がどれくらい有ったかは不明です。又、アイヌの人達の人骨の一番古いものは15世紀のものとされていますが、13世紀頃のアイヌの人達の身長も不明です。

1990年頃に、新聞記事で読んだ記憶があるのですが、当時、オホーツク沿岸にはオロツコ系とされる30人はどの人達が住んでいて、その人達の身長は成人男子でも155cm位の小さな人達であったとしていました。

因みに、北海道北部の稚内の西に「礼文島」という離島があり、この「レブン」はアイヌ語の「ｒ ｅ ｐ－un（沖の、沖へ行く）」に由来します。

又、「アイヌユーカラ」の中には、「レプンクル（沖に住む人）」や「レプンカラフト（沖の樺太）「レプンノツ（沖の岬）」「レプンサンタ（沖の山丹、中国東北部・黒龍江付近）」等の言葉が出てきます。

「アイヌユーカラ」の大半を占める「ヤウンクル（アイヌの人達）」と「レプンクル」の戦いの物語について、自らもアイヌの人であった北大教授の知里真志保は、「アイヌの人達」と「オホーツク文化人」との戦いであるとしています。

尚、サハリンの「小人伝説」とされる「トチセングル」に関して、私には資料がありませんが、「土の家に住む人」の意味とされており、「コルポクウンクル」と同様、必ずしも「小人」を意

味しません。因みに、「オホーツク文化人」も竪穴住居に住んでいました。そして、サハリンの「オホーツク文化人」の竪穴住居の外壁は防寒対策用に土で葺かれていました。まさに、「土の家に住む人」達なのです。

20～30cmくらいの小人であれば「神話」や「おとぎ話」になりますが、アイヌの人達より少し背の低い人達であれば「歴史的事実」になります。古田先生は、戦前、ニニギノミコト達が天上から天下ったとしていた「天孫降臨神話」を、壱岐、対馬の天国（アマクニ）にいた武装集団が海を渡って北部九州を武装侵略した「歴史的事実」であると論証されました。私達が「神話」や「民話」、「おとぎ話」として知っているものの中にはまだまだ多くの「歴史的事実」が隠されているのではないでしょうか。この「コロポックル伝説」のように。

侏儒国について

名古屋市　　石田敬一

1　古田武彦説

投馬国の航路の起点について、不弥國、伊都國、末盧國又は帯方郡の郡治などの説があります。私は、帯方郡の郡治を起点とする説です。

先師古田武彦は、「邪馬台国はなかった」（ミネルヴァ書房、2010年ほか）において、「魏使は見た！侏儒國」の小見出しを付して、魏使は投馬国まで「九州東岸廻りの航路」で行ったとし、投馬国を南九州に比定した上で“三世紀に九州に来た中国人が九州東岸廻りの航路をとっているさいに、四国西南部において「いちじるしく背の低い種族が生活しているのを見た」と報告している”（ミネルヴァ書房、318頁）とされました。つまり、古田説は、投馬国への航路の起点を博多湾岸とした説です。

投馬国への起点を博多湾岸とした古田説は、投馬國は女王国以北の国とする後述Dの記事と矛盾します。投馬國を南九州に比定したことにより侏儒國の比定も連動して間違えたものと私は考えます。

A　東行至不彌國百里。官曰多模、副曰卑奴母離。有千餘家。

東へ行くと、不弥国に百里で至る。長官は多模、副官は卑奴母離。

千余家有り。

B　南至投馬國、水行二十日。官曰彌彌、副曰彌彌那利。可五萬餘戸。

（帯方郡治から）南方、投馬国に水行二十日で至る。

官は彌彌、副官は彌彌那利。五万余戸ほど。

C　南至邪馬壹國、女王之所都、水行十日、陸行一月。

官有伊支馬、次曰彌馬升、次曰彌馬獲支、次曰奴佳鞮。可七萬餘戸。

（帯方郡治から）南方、邪馬台国、女王の都のある所に水行十日と　陸行一月で至る。

官に伊支馬、弥馬升、弥馬獲支、奴佳鞮があり、七万余戸ほど。

Aの記述スタイルとB，Cの記述スタイルは、全く違います。

この違いをしっかり理解しなければなりません。

Aは、「東行至」となっていますが、これに対して、BとCは「行」がなく単に「南至」と記述されています。Aの「東行至」は「東に行くと～に至る」の意味であり、B，Cの「南至」は「（帯方郡治の）南方～に至る」の意味です。Cの記事は、帯方郡治から邪馬壹國までの水行・陸行のかかる月日数を示しています。Bも、Cと全く同じスタイルの記述方法ですから、Bの「南至」も「（帯方郡治の）南方～に至る」の意味です。つまり、「水行二十日」は、帯方郡治を起点とする日数を示しています。

Cの記事を帯方郡治からの日数と認めるならば、Bの記事も帯方郡治からの日数となることは私は必至であると考えます。

そして、A，B，Cの記事に続いて、次のDの記事があります。投馬國は、Dの記事の前に戸数や道理が示されている国ですので、女王國より北に位置する国です。

D　自女王國以北、其戸數道里可得略載、其餘旁國遠絶、不可得詳。　次有斯馬國、・・・・

・・・・次有奴國。 此女王境界所盡。

女王國より以北は、其の戸数・道里の略載が可能だが、其の余の傍国は遠く絶（へだ）たり詳（つまびらか）には得られなかった。次に斯馬國あり、・・・・・・次に奴國あり。此れが女王の境界が尽きる所。

古田説では、博多湾岸から投馬國へ至る航路の途中に、四国の西南岸に侏儒國を見たとしていますが、『魏志』倭人伝には投馬國は女王國の北に位置すると記されていますので、古田説を始め不弥國、伊都國、末盧國を起点として投馬國を女王國より南の南九州などに比定する説では、Dの「女王国より以北」の記事に明らかに矛盾します。

投馬國は女王國より北に位置しますので、投馬國を南九州に想定して、その航路の途中である四国の西南岸に侏儒國を比定するのは誤りであると私は考えます。四国の西南岸に低身長の人骨が発見されたとする考古学上の支持も聞いたことがありません。

２　種子島と侏儒（朱儒）國

「東海の古代」193号で林伸禧氏から、ウエブサイトのwikipediaによると、種子島では弥生時代から古墳時代にかけての小人（しょうじん）の人骨が発見され、これが朱儒國ではないかとの記事があると提示されました。

『魏志』倭人伝でも『後漢書』倭伝でも侏儒（朱儒）國は女王國から南へ四千余里と記されているのみです。

E　女王國東渡海千餘里，復有國，皆倭種。又有侏儒國在其南，人長三　四尺，去女王四千餘里。　（中華書局版『三國志』856頁）

F　自女王國南四千餘里至朱儒國

（中華書局版『後漢書』2822頁）

「水行」や「渡海」など海を渡るとは記されていませんので、九州本島内に位置すると推測していました。つまり、侏儒（朱儒）國は、南九州にあり、海を渡った種子島ではないと考えていました。しかし、考えを改めました。

というのも、あらためて『魏志』倭人伝の記事を見れば、陸行とも水行とも特定されていません。また、種子島の他に南九州から低身長の人骨の発見はありませんので、やはり種子島が最有力候補といえましょう。しかも侏儒國の人は人長三四尺ですから倭種ではないようです。

さて、Eの侏儒國の記事に下線で示したとおり「其南」があります。この「その」は、「復有國」の国名の無い国ではありません。また、「皆倭種」でもありません。ここの主題は女王國ですから、「其」は女王國を指し、女王國の南にあって、女王（國）を去ること四千余里であると示されていることを意味します。

あらためて「其」についてその使われ方を確認します。

「其」は、直前の国の人のことを指さず、主題となっている国であることが明確に分かる例を『後漢書』から示します。

韓有三種、一曰馬韓、二曰辰韓、三曰弁辰。馬韓在西、有五十四國、其北與樂浪、南與倭接。辰韓在東、十有二國、其北與濊貊接。弁辰在辰韓之南、亦十有二國、其南亦與倭接。

（中華書局版『後漢書』三韓、P2818）

韓には三種あり、一に馬韓、二に辰韓、三に弁辰という。馬韓は西に在り、五十四カ国、その北に楽浪、南に倭と接する。辰韓は東に在り、十有二国、その北に濊貊と接する。弁辰は辰韓の南に在り、また十有二国、その南はまた倭と接する。

韓には、馬韓、辰韓、弁辰があり、最初に馬韓のこと、次に辰韓のこと、最後に弁辰のことが記されています。ここでは「其北」が２箇所、「其南」が１箇所あります。最初の「其北」の「其」は五十四カ国のことではなく主題である馬韓のことです。馬韓の北に楽浪が有り、南に倭があると記されています。次の「其北」の「其」は十有二国のことではなく主題の辰韓を指します。辰韓の北は濊貊と接します。「其南」の「其」は辰韓や十有二国ではなく、主題の弁辰のことです。

したがって、これらの例から、『隋書』倭國伝の「其南」の「其」は、その直前に記述された国や倭種のことではなく、主題である女王國を指します。つまり、侏儒國は、女王國の南方に位置します。女王國は北部九州にありますの

で、種子島は候補地に該当します。

種子島の広田遺跡は、昭和30年の台風で露出した３世紀から７世紀までの集団墓地であり、ここを調査したところ、157体の人骨が出土し、その平均身長が成人男性で平均154cm、女性で平均143cmしかなく、同じ頃の北部九州の成人より10cm程度低いことが判明しました。豊富な貝の装身具を付けていたことと北部九州や周防灘の古墳時代前期までの土器が発掘されたことから北部九州などとの交流が認められます。

アフリカにも同様の背が低い人種がいます。赤道森林地帯に分布する狩猟採集民のピグミーは、平均身長150cm以下の小人（しょうじん）として有名であり、かつてはアフリカ大陸の広い地域にいて、今もアフリカのコンゴ共和国を中心にしてかなり広範囲に地域に分散して数万人が住んでいます。また、南部アフリカのカラハリ砂漠に住む狩猟採集民族のサン人は、平均155cmの低身長で、種子島の人骨とほぼ一緒の身長です。様々な要因で減少しましたがアフリカ最古の住民であると考えられており、現在でも10万人程度が住むとのことです。このように世界にはピグミーや低身長のサン人が現存していることからして、３世紀の種子島に低身長の人骨があっても不思議ではありません。なお「人長三四尺」の長さの問題については別稿に譲ります。

注目すべきことは、卑弥呼の時代に小人（しょうじん）が種子島に住んでいた証拠があるということです。

また、『魏志』倭人伝での「侏儒」、『後漢書』倭伝での「朱儒」の文字の持つ意味は次のとおりです。

1　背丈が並み外れて低い人。こびと。

2　見識のない人をあざけっていう語。

したがって、これは、考古学の小人（しょうじん）の遺骨と中国史料の侏儒（朱儒）の記事が一致する、希な例と思われます。

こうした考古学と中国史料の一致を冷静に受けとめれば、侏儒（朱儒）國は、種子島の可能性が高いと思います。また、朝鮮半島から九州まで三千里と記されていますので、女王國から南四千余里の位置を忠実に地図上で示すと次図のようになりますので、侏儒（朱儒）國が種子島であることを裏付けます。

3　種子島の砂鉄と辰砂

種子島は、天文十二年（1543年）に鉄砲が伝来した島として有名です。種子島には古来からの豊富な砂鉄があって、これを製鉄する技術があったからこそ、鉄砲伝来から一年後には数十挺の鉄砲を製造することができたとされます。外国船が偶然に種子島に漂着して鉄砲が「伝来」したというよりは、あらかじめ原料の砂鉄と製鉄の技術とを持ち合わせていた島であるので、種子島時堯（たねがしま ときたか）がそれを背景にして鉄砲を購入し種子島から日本の鉄砲製造を発展させたというのが実際ではないでしょうか。

種子島には、大量に砂鉄が堆積する砂鉄浜があり、たたら製鉄が行われていました。その砂鉄とともに古代朱として有名な辰砂（しんしゃ）を産出します。この成分は真っ赤な硫化水銀で、弥生時代には埋葬の甕棺や土器等に塗布して大いに使用されました。

これらの砂鉄や辰砂の交易をおこない繁栄した種子島だからこそ、『魏志』倭人伝に侏儒（朱儒）國として特記されたのでしょう。

4　侏儒國の意味

もう一点、気づいたことがあります。

『魏志』倭人伝では、「侏儒」、『後漢書』倭伝では「朱儒」とあります。『後漢書』倭伝より『魏志』倭人伝の方が中華思想が強く厭字の使われ方が多かったことは別稿で示したところです。現代では「侏儒」と「朱儒」は「小人（しょうじん）」を意味する言葉として同じように使われますが「侏」と「朱」では、その文字の持つ意味が異なります。

人偏が伴う「侏」は「みじかい、背が低い。あざむく」の意味であり、まさに蔑む意味合いが強い文字です。たとえば、「異民族の言葉を卑しめていう語」の意味として「侏離（シュリ）」のように使用されます。これに対して、人偏の無い「朱」は、「朱色、明るい赤色、鮮紅色」のほか、辰砂（しんしや）を精製した赤色系の顔料「朱」を意味します。厭字ではありません。

また「儒」は『魏志』も『後漢書』も共に同じ文字が使われています。「儒」は儒教をさすほかに「背が低い」意味があり「侏儒(朱儒)」は熟語で小人を指します。「朱」に人偏を付けて厭字の「侏」にしているように、「儒」も人偏を付さない「需」の文字が本来の文字ではなかったかと推測します。「需」は「もとめる。必要とする」を意味します。

したがって、「侏儒國」は、ややあざけりが加わって「こびと」の国を意味しますが、もし、もともとの表記が「朱需國」であったとすれば、それは「朱を求める国」という意味となり「朱」の顔料を産出する国としてたいへん相応しく、「朱」を交易する誇りを持って自らが付けた国名であるといえましょう。

『魏志』倭人伝では、中国側が「朱需國」の文字にそれぞれ人偏を付し「侏儒國」として、小人（しようじん）で弱々しい国の国名に表記したのでしょう。つまり、自らは朱を求めるという意味として名付けた国名を、低身長だった姿から、中国側は中華思想により蔑む意味をもたせ、厭字の侏儒としたのだと考えます。

5　種子島の発音

「侏」と「朱」に共通する発音は、漢音では「シュ（呉音 ： ス)」です。ピンインでもウェード式でも基本は「shu」の発音です。また「儒」と「需」は「ジュ（呉音 ： ス)」でしょう。したがって、「侏儒（朱儒）國」は「シュジュ」と発音したと思います。

さて、種子島は、現在、訓読みで「たねがしま」と呼ばれます。天武六年(677年）二月の是月條に「多祢嶋人」の表記がありますが、「種子島」の名の確からしい由来はないようです。

神武天皇即位前期の甲寅年十月辛酉条には、「種子」の名称記事がありますので、天武紀の「多祢」以前には「種子」と表記されていた可能性があるでしょう。

是時、勅以菟狹津媛、賜妻之於侍臣天種子命。天種子命、是中臣氏之遠祖也。

（神武天皇即位前期の甲寅年十月辛酉条）

私は、「種子島」の地名は元は音読みだったのではないかと考えています。

『隋書』倭國伝に記される阿蘇山は、現在の文字と全く同じ地名であり、音読みの「アソザン」でしょう。また、竹島をチクトウ、都斯麻をツシマ、一支をイキ、竹斯をチクシとそれぞれ地名を音読みで呼んだように、「種子島」の「種子」はきっと音読みだったはずです。「種」は、日本語の漢音でシュであり、子は、漢音で「シ（呉音:ジ)」であり、「シュシ」や「シュジ」です。「侏儒（朱儒）國」の「シュジュ」の音感は、「種子」の「シュシ」「シュジ」とよく似ているのは偶然でしょうか。

「種子島」の「種子」は現在は訓読みにされて「たね」ですが、もともとは音読みの「シュシ」だったと思います。種子島の人々は自らを「朱」の需要に応えるためそれを産出する国として「朱需（シュジュ)」と呼んでいたものを、外部の人々は、その「朱需」によく似た発音の文字「種子」を充てるようになり、その後、音読みから訓読みになって「たねがしま」と呼ばれるようになったのではないかと想像します。いかがでしょうか。

『日本書紀』年表４

瀬戸市　　林　伸禧

はじめに

現在まで、

・『日本書紀』年表１（神代上・下）
　（「東海の古代」１４１号、平成２４年５月）
・『日本書紀』年表２（神武紀～應神紀）
　（「東海の古代」１３８号、平成２４年２月）
・『日本書紀』年表３（仁徳紀～武烈紀）
　（「東海の古代」１５０号（平成２５年２月）

を作成し発表したが、今回「『日本書紀』年表４

（継体紀～崇峻紀）」を作成したので報告する。

変更点

今回から次のように変更した。

① 様式

「横書き」から「縦書き」に変更した。

② 記事単位

日単位で整理し、記事がない年は１行設けていたが、記事がない月について１行設けることとした。すなわち、年単位から月単位に変更した。

③ 古代逸年号を西暦に準じて記述した。

④ 「天皇系譜以外の人々」覧は、詳細に記述した。

⑤ 頁数が大幅に増加したので、「解説（３１頁）」と「年表（１２８頁）」とを分けて、年表の表題を「『日本書紀』年表四・別冊　継体妃～崇峻紀」として別冊扱いとした。

拘奴国について　その４

名古屋市　　石田敬一

１４　距離の問題

『後漢書』は長里であるから拘奴國は近畿の大和王朝であるとの説が前回の例会で提示されました。

これまで私は、『後漢書』倭伝の位置情報について、拘（コウ）奴（ド）（ヌ）國以外は『魏志』倭人伝の内容と変わらないと示してきました。たとえば、『魏志』倭人伝の女王國から朱儒國までの距離４千余里は『後漢書』倭伝においても４千余里で変わっていません。ということは、『後漢書』倭伝は『魏志』倭人伝の距離の概念を踏襲しています。したがって『後漢書』に長里で記された記事があったとしても、少なくとも『後漢書』倭伝においては、一里420m程度とする長里で記述されているとはいえません。

『魏志』倭人伝では朝鮮半島から九州までが３千余里ですので、東に海を渡る「千余里」は中国地方にとどまると考えられます。万一、この「千余里」について長里だとするのであれば、千里は420km程度ですから博多湾岸からではせいぜい鳥取辺りまでとなり、とても大阪や京都には至りません。

朝鮮半島から九州までの距離の１／３が千余里ですので、距離の問題からしても、私は拘奴國は中国地方に位置する方が妥当性があると考えます。

１５　鉄器の分布が示す拘奴國

拘奴國に関して私は主に祭器や埋葬文化とともに拘奴國や官名などから「拘」の国は中国地方にあるとその１～３で述べてきました。

整理すれば次のとおりです。

(1) 中国史書のあり方は、新しく得られた情報によって、先の史書の記述を修正するので、『魏志』倭人伝の記述に偏重し『後漢書』倭伝の記述を軽視することは間違っている。

(2) 卑彌呼と卑彌弓呼の尊称・称号の共通性から、女王國と拘奴國は同じ銅矛・銅剣文化圏にあるので、東海や近畿を中心とする銅鐸文化圏に拘奴國を比定するのは妥当ではない。

(3)『魏志』倭人伝では、女王國は北部九州に位置し、その南に拘奴國や侏儒國があるとする一方で、東に海を渡ったところの倭種（海東の倭種）については国名を示すことができなかったが、『後漢書』倭伝では、その国名を拘奴國であると明らかにしている。

(4) 拘奴國は、九州本島から東に海を渡った千余里にあるので中国地方に比定するが妥当である。

(5) 拘奴国の「奴」は、委奴や匈奴の厭字を付したものであるので、国名の本体は「拘」（コウ・ゴウ）である。

(6)「拘」は、中国地方最大の「コウ（ゴウ）」の名が付く河川「江の川」流域を中心として、「江の川」流域から発達した中国地方独自の四隅突出型古墳の埋葬文化を有する区域の可能性が高い。

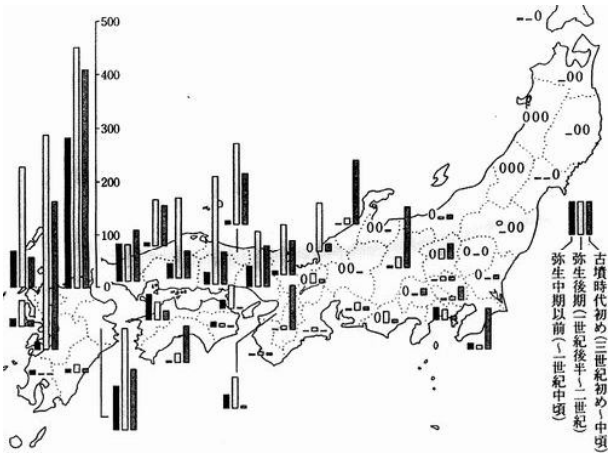
以上のとおり、これまでは、主に祭器や埋葬文化に関する点から拘奴國が近畿地方にはなく中国地方にあることを解明しました。

さて、弥生時代後期には鉄が重要な要素です。

次に武器である鉄器について考察し、鉄器の分布からも拘奴國が中国地方にあることを示します。

この鉄器の分布は、資料によって少し違いますが、ほぼ同様の分布を示しており、たとえば、川越哲志編『弥生時代鉄器総覧』（東アジア出土鉄器地名表Ⅱ、2000年）では、女王國を中心に倭人の連合国の地域と考えられる北部九州が最も多い分布を示しています。熊本県以北が圧倒的であり、この地域が倭人の国々が存在したところと考えて間違いないでしょう。北部九州に次いで、広島、岡山、鳥取を中心にして中国地方における鉄器の分布が多いといえます。また、この分布図にはありませんが、素環頭刀子などの刀子は福岡、熊本についで鳥取における出土が多く広島、山口、岡山も比較的多い状況です。

これに対して、弥生後期の近畿に鉄器はほとんどありません。



なお、この古代の中国地方には、砂鉄や岩鉄が分布していたことが知られており、中国地方の鉄器の製造技術や資源採取を発展させる下地があったと考えられます。

以上のとおり、鉄器に関しても、北部九州についで中国地方の分布が高く、女王國に対抗する拘奴國は近畿地方ではなく中国地方にあったことを指し示しています。

ところで、前号の「その３」では、剣元が差し込み型のものでも長柄をつければ矛として使用できる可能性に言及しましたが、神庭荒神谷遺跡の358本は、差し込み部分が短いので、これは革などを巻いて片手で持ち剣として使用したと推測し考えを修正します。

１５　「コウ」と「タカ」

(1) 高野寺

四隅突出型古墳の分布する地域にある、３つの高野寺は、面白いことに同じ漢字で表記されながら読み方が違います。

一つ目の島根県出雲市東園町の曹洞宗の高野寺は、「コウヤジ」と読みます。これに対して、二つ目の島根県大田市温泉津町井田の真言宗御室派の高野寺は「タカノジ」と読みます。タカノジは、弘仁五年（814年）に開基された古刹です。この太田市の高野寺は、石見銀山の天領にあり「石見の高野山」とも呼ばれています。

これらの高野寺のほかに出雲市野石谷町には、三つ目の高野山真言宗の高野寺があります。読み方は不確かですが「コウヤジ」と思われます。

つまり、島根県の「高」は、「コウ」と「タカ」の二通りの読みがあります。「高」は二通りの読み方で呼ばれますが、同一の地域名を表しているようです。

(2) 「コウ」と「タカ」の付く地名

「江の川」の流域には「高」の付く地名が多く、広島県に、安芸高田市、安芸高田市高宮町、広島市高屋町、三原市高坂町、庄原市高野町、神石高原町、三次市高杉町があります。

また「コウ」と呼ばれる地域も次のとおり広がっています。島根県の江津市のほか、広島県に、安芸高田市甲田町、三次市甲奴町、旧甲山町（現世羅郡世羅町）、東広島市河内町などがあります。

「江の川」流域以外では、鳥取県に江府町があり、島根県益田市から鹿足郡にまたがって高津川、さらに岡山県西部から広島県にかけて高梁川があります。出雲市には次のとおり二つの高瀬山があります。

(3)　二つの高瀬山

出雲には斐伊川（ひいかわ）を挟んで次のとおり北と南に二つの高瀬山（たかせ）があります。

①. 島根県出雲市斐川町地内
　　高瀬山（たかせ）314m　斐伊川の北

②. 島根県出雲市稗原町地内
　　高瀬山（たかせ）304m　斐伊川の南

①の高瀬山は旧出雲郡河内郷と呼ばれた地域にあります。

また、②の高瀬山のすぐ東には、河内神社（雲市上島町3495）があります。

２つの高瀬山のある出雲は、それぞれ「河内」の地域名と関係深く、その語感「カワチ」は「古智」を想像させます。

１６　「古智」

「拘」の国の中心地は、いったいどこになるでしょうか。

「拘」の国は、北部九州と同じ「銅矛・銅剣文化」に重なりながらも「江の川」流域を中心に弥生時代後期に栄えた独自の四隅突出型古墳の埋葬文化がある地域であり中国地方に広がりを持っています。

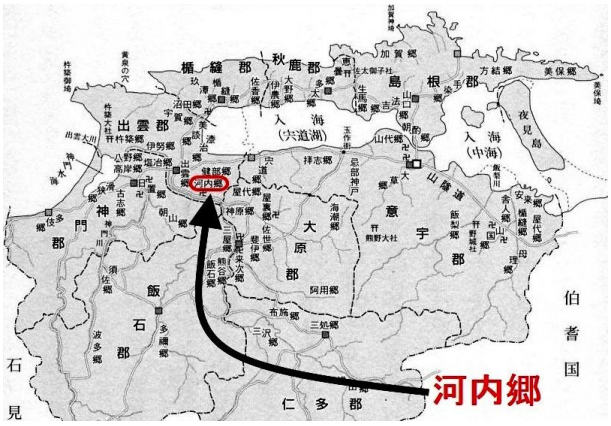
また、中国地方は北部九州に次いで鉄器が多く出土するばかりではなく『魏志』倭人伝で重要視される絹の出土地数が福岡に次いで島根が多いなど、中国地方に武力や財力の点で女王國に対抗する国があったと思われます。

この「拘」の国の長官である「拘」の「古智卑狗」は、「古智」の長官を意味すると考えられますので、「古智」が「拘」の国の中心地でしょう。

邪馬台国近畿説の論者は、近畿の「河内」が「拘奴國」の中心地「狗古智」とされます。しかし、先述のとおり、近畿には距離の問題を始め弥生後期に鉄器の産出がほとんどありませんので、女王國と対抗した「拘奴國」の比定地としては認めがたいです。ただ、「古智」と「河内」の語感が近いこととは認められるでしょう。

出雲は、古くは出雲郡河内郷と呼ばれています。この「河内郷」の「カワチ」は「古智」の「コチ」の語感に似ています。

その語感に似た「河内」が「拘」の中心地であったと思われます。



『出雲国風土記と古代遺跡』（勝部昭著、山川出版、2005年）49頁より抜粋引用

また、この出雲郡河内郷の丘陵地帯には、銅剣358本が出土した神庭荒神谷遺跡があり、ここに１世紀の時代に既に大きな力を持った地域の存在が示されています。さらに、神庭荒神谷遺跡の近隣、出雲平野部には、弥生時代後期から古墳時代前期の古墳群である西谷古墳群（島根県出雲市大津町字西谷）があります。ここには卑弥呼の時代である弥生後期後半の２～３世紀頃に築造された１・２・３・４・６・９号の６基の四隅突出型古墳があり、とりわけ３号墳は、突出部が大きく発達しており、また、勾玉や鉄剣、さらには吉備の特殊器台などに似た土器が多く埋葬され、吉備ともつながりがある権力者の墓であると考えられます。この西谷古墳群のある出雲の「コチ」が卑弥呼に対峙した頃の拘奴國の中心地域ではないかと思われます。

つまり、「拘」の国の中心地である「古智」は、神庭荒神谷遺跡や西谷古墳群などの遺跡の状況とともに、その語感に似た「河内」の地名から出雲にあったと私は考えます。

１７　「拘奴國」のまとめ

以上、述べてきたとおり、拘奴國は、北部九州の女王國である倭國の海東に位置しており、その国名の主体である「拘」は、日本語、中国語で「コウ（ゴウ）」の発音です。それは「コウ」の国を連想させる「江の川（ごうのかわ）」流域ではないかと思われます。この「江の川（ごうのかわ）」流域を発祥の地として発展した四隅突出型古墳の分布する地域が「コウ」の国の範囲と考えられます。この四隅突出型古墳が分布する地域は、「コウ」「タカ」の地名が数多く存在する地域です。

この地域が『後漢書』倭伝に倭と対抗する倭種の国と記された、拘奴國であると考えます。

この拘奴國の中で、とりわけ、３世紀前後には、四隅突出型古墳が出雲平野から大山山麓に集中しているとともに、この出雲平野のあたりは、かつて「出雲郡河内郷」と呼ばれていたことから、その語感から「拘」の国の「古智」の地域、すなわち拘奴國の中心地域「コチ」であったと考えます。

いずれにしても、九州北部の女王國から東に海を千余里渡ったところは、中国・四国地方しか該当せず、卑弥呼と卑彌弓呼、卑狗と狗古智卑狗などの共通の用語を持っていることからして、倭と拘の国は同じ文化圏にあると考えられ、いわゆる銅鐸文化圏の濃密な地域である尾張や近畿ではなく、倭の九州北部と同じ銅剣文化圏にあって、それが顕著にあらわれている中国地方と思われます。一方、邪馬壹国が栄えた１～３世紀において、独自の埋葬施設である四隅突出型古墳が芽生えた中国地方の「江の川」流域に重なる地域は、鉄器や絹の出土の多さからして、倭に対抗する勢力を持つ地域であると考えられ、それが『後漢書」倭伝に記された拘奴國として最も可能性が高いと考えるものです。

また、その中心地域である「古智」は、古くは「河内」と呼ばれた出雲に位置したと考えます。

ところで、倭女王俾弥呼や狗奴國男王卑彌弓呼の名称が“国名＋官職名＋尊称・称号”で構成されていたことは、以前に示したように「拘古智俾拘」（狗古智卑狗）は“国名＋尊称・称号＋官職名”で示されているようにも思われます。とすれば「古智」は、古い物事をよく理解する賢者の意味を持っている尊称・称号をあらわしており、想像を膨らませれば、それが後々、「江の川」の河の内を意味する地名「河内」に変わっていったのかもしれません。

以上

お知らせ

「古田史学の会」の正木裕事務局長の講演ビデオ「漢字と木簡から短里を解明する」について、正木氏の承諾を得ましたので、ご希望の方に配布します。

前回の例会の内容

■ 天武天皇の不思議

一宮市　竹嶌正雄

書紀における天武天皇の唐突な登場の不思議を解明し、その正体を明らかにした。書紀の記事より生年の特定と動静の推測を行い、大海人皇子は、647年に孝徳天皇の後見人として近畿難波に来た九州王朝の皇太子であるとした。

■ 短里と長里について

一宮市　畑田寿一

『後漢書』は長里で記載されているので拘奴國は近畿の大和王朝の可能性が高いと考える。

■ 朱儒國(『三國志』魏書 列伝倭人條)について

瀬戸市　林　伸禧

小型のフローレス人、朱儒國と考えられる種子島の小人並の人骨、アイヌの小人伝説などから一時期広範囲に小人が生存したのかどうか研究課題である。

■ 拘奴国について　その3

名古屋市　石田敬一

拘奴國は「江の川」の流域を中心に特異な四隅突出型古墳が分布する中国地方にあって「拘」と呼ばれた国であったと考える。

■ 次の会報誌の投稿締切り

１０月３０日(日)

投稿先：furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

例会の予定

■ 今月の例会

(1) 日 時　１０月１６日(日) 13:30～17:00

当日は名古屋まつりが開催され渋滞が予想されますので注意してください。

(2) 場 所
名古屋市市政資料館 第５集会室
名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051

(3) 参加料　500円　（会員は不要）

(4) 交通機関
- 地下鉄名城線「市役所」、東徒歩８分
- 名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩５分
- 市バス「市政資料館南」、北徒歩５分
- 市バス「清水口」、南西徒歩８分
- 市バス「市役所」、東徒歩８分

(5) 駐車場 市政資料館：12台＋α収容(無料)

■ 来月以降の例会日

11月13日、12月18日

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。例会で発表する際は資料を20部用意ください。